



シリーズ 第97回 人権

共に生きる社会 ～父の背中をみつめて～

父は、勤めていた職場を定年退職して20年以上が経過する後期高齢者です。若い頃は会社に勤めながら農業にも従事していて、仕事ばかりしていました。物心がついてから、父と一緒に過ごしたり、家族旅行に行ったりした思い出はほとんどありません。父は、子どもや家族のために働くのが親というものだと考えていたのでしょう。私も父親とはそういうものだと思っていました。でも、ふとした時に父から守られていると感じることがありました。例えば、私が高校生の頃、バスに乗り遅れて困っていると知ると、何をおいても駆けつけてくれました。いざという時に頼りになる父の存在は、私が社会人になってからも変わりませんでした。

父は、2年ほど前までは自治会や老人会の活動に参加していました。地域の人たちと一緒にグループを作って農業を続け、趣味の民謡では、発表会でも歌っていました。そんな父が夏の暑い日に倒れ、その拍子に頭を打ってしまいました。それからしばらくは、大きな病院に入院し頭の手術を繰り返す日々が続きました。

私は毎日のように入院中の父に会いに病室に行きました。幸い父は数カ月で定期的な通院の必要はないと言われるまでに回復しました。その頃の父は、早く農業に復帰してこれまで一緒にやってきた地域の人たちの輪の中に戻りたいと言っていました。しかし、最近は車の運転を諦め、民謡の活動グループからも脱会し、「もう以前のようにできない」と口にしていきます。

それでも、農作業はできなくても農業関係の

会合には参加し、地域の人たちとのつながりを持ち続けています。また、路線バスやコミュニティバスを利用して行政機関や郵便局に出かけるようになりました。

社会では、高齢者への虐待や悪徳商法による被害、孤独死など、高齢者を取り巻くさまざまな問題があります。また、加齢に伴う衰えは誰もが避けて通ることはできません。私は、父が倒れたときに感じた「これまでと同じようにはいかないかもしれない」という思いから、私にできることは何かと考え、父がやりたいと思うことを諦めるのではなく、心の底からそうしたい、自分の意志で人生を歩んでいきたいという意欲を持てるように父と向き合い、共に生きていきたいと思っています。そうすることで高齢者が疎外されたり軽視されたりすることなく、一人一人の生き方や考え方を知り、尊重することができる社会をつくることにつながると信じながら、そのような社会をつくる一員でありたいと思っています。

(50代、男性)



人権豆知識

人権擁護委員を知っていますか

人権擁護委員は、法務大臣が委嘱した民間ボランティアです。学校などで絵本の読み聞かせを通じて思いやりの大切さを伝えたり、いじめをテーマにみんなで話し合ったりする人権教室を開くなど、人権意識を高めてもらうための啓発活動に取り組んでいます。また、面接や電話により、不当な差別、虐待、DVなどのさまざまな人権相談に応じています。